

7月9日討論要旨（食の安全・安心・信頼）

林礼釗（STA）

Guiding Question

食の安全性を巡り、ステークホルダー間に摩擦が生じるのは、心理的要因に誘導された「安全でも安心できない」という社会構造に起因していると考えられます。ここでは、日中間の外交問題に発展してしまった中国食品に関する具体的な事例を元に、多角的な分析を行った結果を紹介します。これらを議論の素材として、以下の3つの視点に発展させつつ考察してみましょう。1 中国食品の安全・安心について。2 中国食品等を巡る日本のメディアの報道とそのあり方。3 食を通じての日中関係から見えてくる課題と今後の展望。

討論では、各問題について主に以下の意見が提起された。

1. A 中国では食品の異物混入問題が度々起こっている。「安全ではないし、安心できない」という状況にあり、子供用の食品などを海外から買って帰る中国人は増えている。また、中国では個人が自作のものをそのまま市場に出回ることが多いため、それらの食品を検査しようがない。さらに、工場環境問題があげられる。衛生面だけでなく、管理面でも多くの問題が存在している。B 2007年に中国でダンボール肉まん事件が起こった。この事件と2008年の毒餃子事件と「連鎖反応」が起こり、日本人に「中国の食は危険だ」という意識を植え付けた。C 食の安全問題はやはり「管理」の問題である。食品はさまざまな種類がある（生鮮食品、加工食品など）。一番安全だと思うものは、自分の目で選び、自分で清潔できるものである。一方、生産過程が見えない食品が一番安全ではないものである。安心について言えば、行き着きの店で買ったものは安心できる。そこに人間関係への信頼感があるからだ。また、小売業者と仕入先の両者の協力が必要であり、消費者が信頼できるような仕組みを構築する必要がある。
2. B 事件当時、日本のメディアはかなりネガティブな表現を多く使った。「国産のものを買ってください」というような宣伝に聞こえた。遠まわしな表現で「中国のものが悪い、国産のものを買おう」という報道が多かった。
3. B 日本の食品の問題は中国ではあまり報道されない。やはり中国では日本のものがよいというイメージが強い。また、昔の日本人は質が多少悪くても中国のものの安さを求めたが、今はそうではない。そこにギャップが存在している。メディアに関しては、どのような表現で報道するかが課題である。

担当教員の総括：

各グループの論点をまとめると、中国人でも中国の食はあまり安全ではないと思っているところが一つ重要な点である。衛生面だけではなく、公害などの問題が重なって中国の食の問題を複雑化したため、単に衛生面が改善されただけでは問題の解決はまだ難しい。また、第3グループの論点にあったように、ファーストフードなど、生産過程が見えない食品が多くなっており、それに対してはやはり安心できない。おそらく皆さんは中国にいたときはこのような問題をあまり意識しておらず、日本に来てから意識するようになった。ある意味で皆さんは国内にいる人たちと違う視点から問題を相対的に見ることができる。改善する道は難しいが、自分の専門で持って改めて考えることが大切であり、何らかの形でそれぞれの知識を活用して、問題の解決に提案してほしい。